

府中・山内瓦窯跡について

～讃岐国分寺瓦屋の基礎的整理～

渡部 明夫

1. はじめに

讃岐国分寺跡から南西に約1 km離れ、坂出市府中町前谷から高松市国分寺町新名空路にかけて所在する府中・山内瓦窯跡は、讃岐国分寺・国分尼寺の所用瓦を出土する瓦窯跡として知られている。現在のところ、讃岐国分寺跡・国分尼寺跡の初期の所用瓦を出土する瓦窯跡はほかに知られていないとともに、瓦窯跡から出土する軒瓦の型式は全て讃岐国分寺跡又は国分尼寺跡にみられることから、府中・山内瓦窯跡は讃岐国分寺・国分尼寺の専用瓦屋と考えられている。

府中・山内瓦窯跡は大正11年10月12日に国史跡に指定されたが、これは同年7月に刊行された『史蹟名勝天然紀念物調査報告1』によって、讃岐国分寺跡・国分尼寺跡・国分寺瓦窯跡(府中・山内瓦窯跡)が取り上げられ、その重要性が明らかになったことによるものであろう。この報告の中で、府中・山内瓦窯跡では当時現存していた6基を含めて10基の瓦窯跡が確認されており(第1図)、天平期以後の瓦を出土すると述べるとともに、そのうちの有段窖窯1基は完全に近い状態で残るとして、実測図を掲載している⁽¹⁾。

『史蹟名勝天然紀念物調査報告1』には府中・山内瓦窯跡から出土した軒瓦は紹介されなかったが、当初から注目されていたようで、大正14年に開催された財団法人鎌田共済会郷土博物館の第1回展示会に2点の軒瓦が展示されている⁽²⁾。しかし、ここでも瓦の拓本・写真等は刊行物に掲載されなかった。

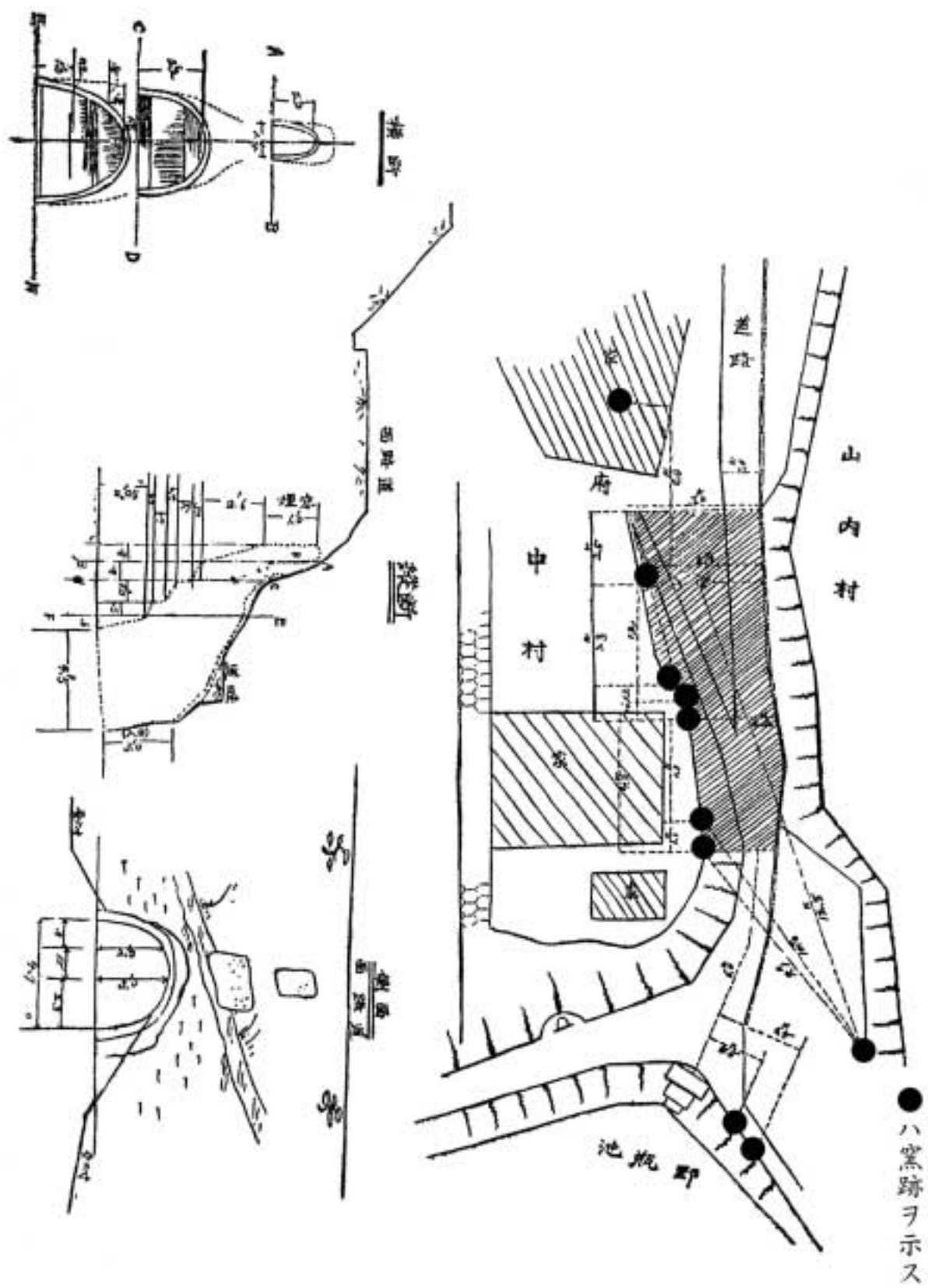
その後、岡田唯吉氏は昭和12年に発表した「讃岐国分寺及全瓦窯跡」⁽³⁾の中で、用水池築造のための掘り下げ断面付近に7、8基の瓦窯跡が存在していることを明らかにした。この瓦窯跡は山内村(現高松市国分寺町)に属するとしており、先の『史蹟名勝天然紀念物調査報告1』の瓦窯跡分布図には山内村に3基の瓦窯跡が記されていることから、岡田氏に従えば全体では少なくとも14～15基の瓦窯跡が確認されたことになる。

さらに、岡田氏は、昭和13年の『国分寺の研究』⁽⁴⁾においても同様の記述をするとともに、府中・山内瓦窯跡出土の八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM07 2点を拓本で紹介している。

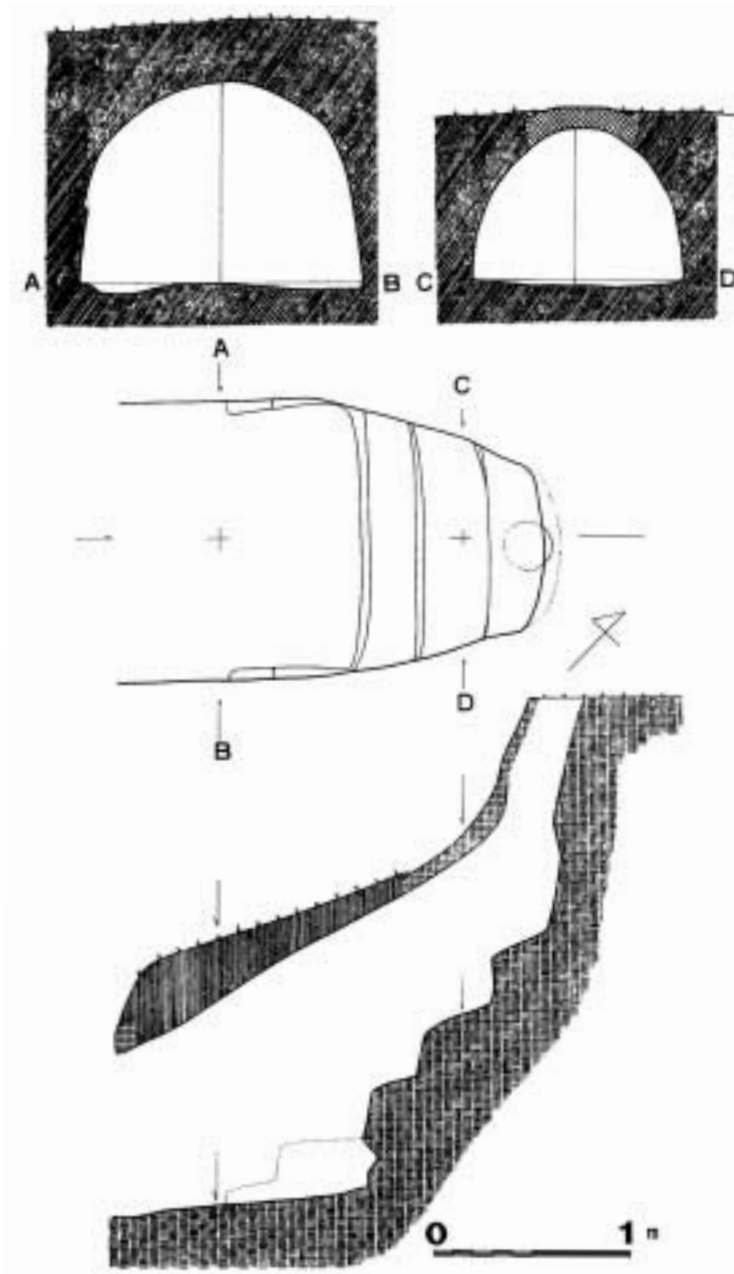
府中・山内瓦窯跡に関しては、その後しばらく活発な研究は行われなかったが、昭和42年に安藤文良氏は香川県内の古瓦を集成する中で、府中・山内瓦窯跡出土の軒瓦を取り上げ、SKM07⁽⁵⁾のほか、奈良時代に属する八葉複弁蓮華文軒丸瓦KB103B・均整唐草文軒平瓦SKH01Cを紹介し⁽⁶⁾、さらに翌昭和43年には松本豊胤氏が、現存する比較的保存状態の良い有段窖窯1基の実測図を紹介している(第2図)⁽⁷⁾。

しかし、それ以降は本格的な調査や基礎的な研究は行われず、府中・山内瓦窯跡の紹介がなされても⁽⁸⁾、軒瓦の新資料が若干追加された程度で、瓦窯跡の分布や構造、时期的な変遷、瓦生産の内容などについては依然として明らかでなく、中には指定地内の現存瓦窯跡の数にすら誤解が生じている⁽⁹⁾。

以上のように、府中・山内瓦窯跡は讃岐国分寺・国分尼寺の瓦を焼成した瓦窯跡として早くから注目され、国史跡に指定されたが、現在までのところ本格的な調査・研究がなく、遺跡の内容や瓦生産の実態などはほとんど分かっていない。従って、本稿では、遺跡の現状把握と出土瓦の集成などの基



第1図 府中・山内瓦窯跡分布図



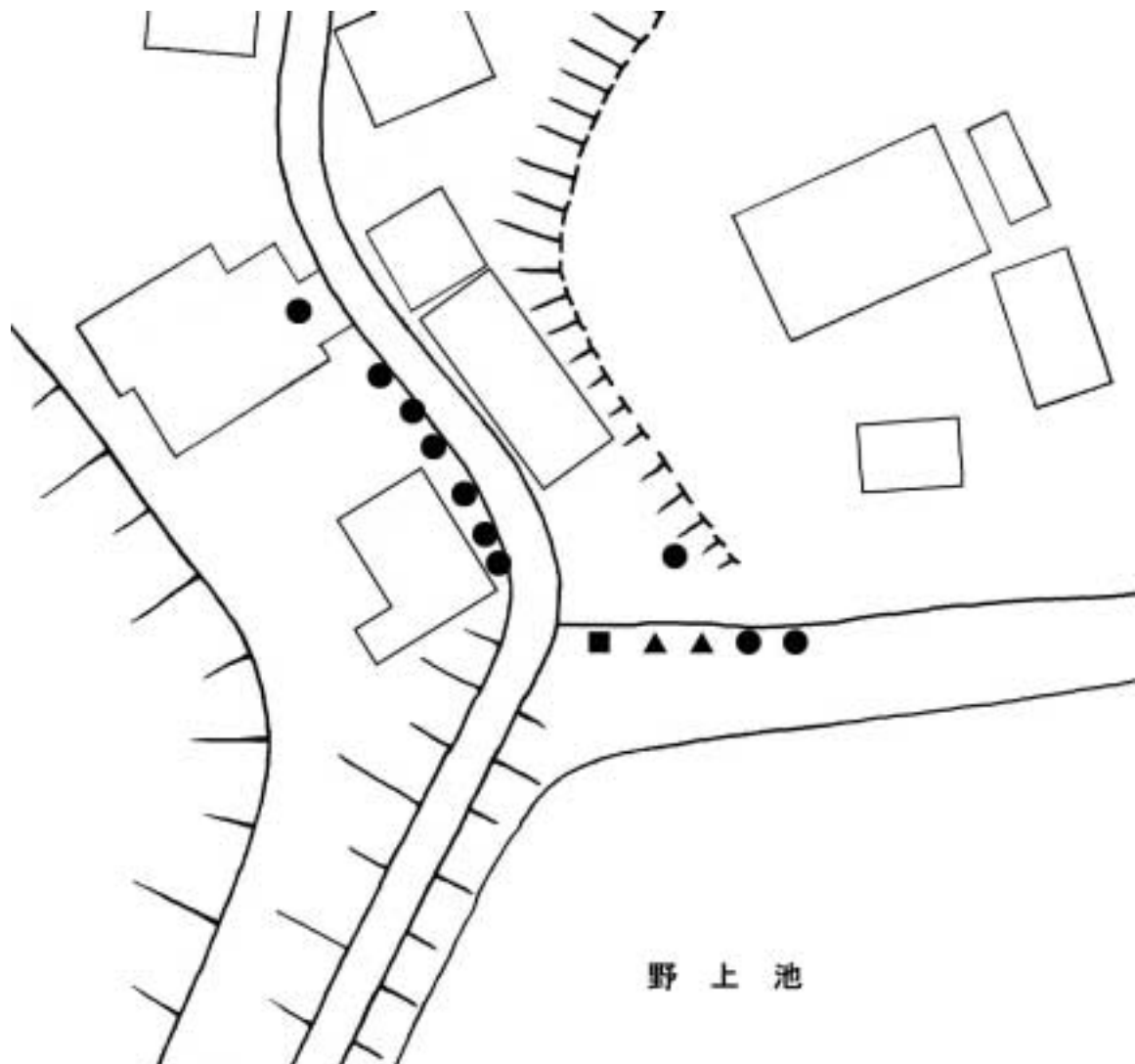
第2図 有段窖窯実測図

礎的作業を通じて、現時点でのまとめを行い、若干の問題について考えてみたい。

2. 瓦窯跡について

府中・山内瓦窯跡は、古墳時代の刳拔式石棺の石材産出地として有名な、鷲ノ山の北端に位置する標高約250mのピークから北西に下った山麓の谷の北側斜面に位置する。現在、この谷の下端部は堤で堰き止められて野上池(大正期には「野瓶池」と呼称)が造られているが、その堤の北端付近に瓦窯跡が分布している。

多くの瓦窯跡は、谷の斜面に沿って、ほぼ横一列に分布しているが、一段高い斜面でも1基確認されている。現状ではこの瓦窯跡は確認できないが、付近に窯壁片や布目瓦の小片が散布していること



第3図 府中・山内瓦窯跡の窯跡分布想定図（約1：500）

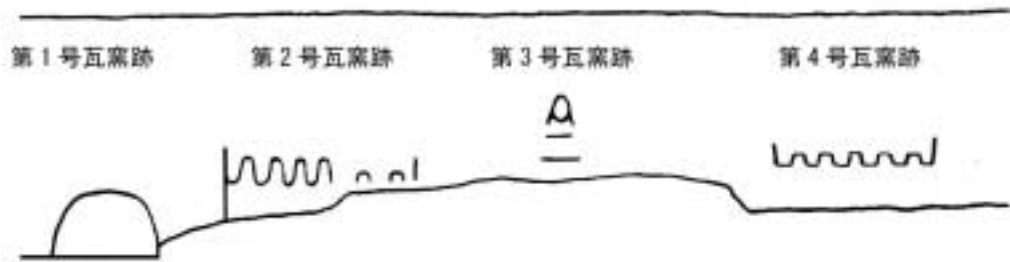
- 『史蹟名勝天然記念物調査報告1』に記載された瓦窯跡
- ▲岡田唯吉「讃岐国分寺及全瓦窯跡」『讃岐史談』2-2 1937による瓦窯跡
- 安藤文良氏によるSKH04採集の瓦窯跡

から⁽¹⁰⁾、瓦窯跡の存在は疑いないものと思われる。今後斜面の上部から新たな瓦窯跡が発見される可能性もあろう。

前述したように、岡田唯吉氏は山内村側において、用水池(野上池)築造の際に掘り下げられた断面付近で7、8基の瓦窯跡を確認している。山内村は現在の高松市国分寺町に属し、野上池の北岸と東岸が含まれるが、東岸は上流側にあたることから池の築造に際して掘削する必要はなく、岡田氏の村域認識に誤りがなければ、「7～8基」の瓦窯跡は北岸にあったと考えられる。

したがって、先の『史蹟名勝天然記念物調査報告1』の瓦窯跡分布図では、野上池の北岸部に3基の瓦窯跡が記されていることから、ここにさらに4～5基の瓦窯跡があったことになり⁽¹¹⁾、府中・山内瓦窯跡全体では少なくとも14～15基の瓦窯跡があったことになろう(第3図)⁽¹²⁾。

そのうち、現在確認できる瓦窯跡は4基である(第4図)。いずれも坂出市府中町に属し、羽床正男氏の宅地を造成した際の崖面に露出している。崖面は北西から南東にのび、最も北側に位置するのは、天井部を残す有段窯である(第2図)。いま仮に、これを第1号瓦窯跡とし、南東に向かって順次番号をつけると、第2号瓦窯跡はロストル窯、第3号瓦窯跡は有段窯、第4号瓦窯跡はロストル窯である。



第4図 府中・山内瓦窯跡遺構現況略図(1:100)

なお、『史蹟名勝天然紀念物調査報告1』によれば、この崖面から7基の瓦窯跡が確認されているが、1基は羽床氏の住宅の下に位置する。また、他の2基は4号瓦窯跡の東南側(第4図に向かって右側)に位置するが、この部分は土囊で崖面が覆われているので、現状で瓦窯跡を確認することはできない。

第1号瓦窯跡は保存状態の良い瓦窯跡として実測図が紹介されてきた有段窯で、砂礫質の斜面を削り抜いて構築している。松本氏の紹介した実測図⁽¹³⁾から計測すると、現状で長さ約2.35m、高さ約2.65m、開口部は床面の幅1.4m、高さ0.82mである。3段の床面が完存するが、その下方の壁に2段の痕跡を残す。窯体は、下方の2段までは幅約1.4mであるが、上方3段は徐々に狭くなり、最上段の部分で幅約1mとなる。各段は高さ約20cm、奥行き約20~40cmで、各段の角を通した傾斜は約42°である。最上段奥壁の中央上方に、やや奥に傾いた直径25cm前後の煙出しをもつ。松本氏は最下段前面の平坦面を燃焼室の床面として、現状で焚き口と燃焼室の一部を失っているとしているが、この部分は焼成室であり、焚き口と燃焼室は下方に埋まっているのではないかとと思われる⁽¹⁴⁾。なお、残存する窯壁下部は陶質に焼き締まっている。

第2号瓦窯跡はロストル窯である。1号瓦窯跡から約0.9m離れている。窯体の幅は約2.5mで、6条のロストルが残存する。第1号瓦窯跡の覆屋の基礎のコンクリートが、左から4条目のロストルの上を縦に通っている。現状でロストルの露出面は、基部の幅17~21cm、上端の幅15~18cm、高さ40cm弱であり、下部約10cmは地山を削り出し、その上部約25cmは砂混じりの粘土で構築し、さらにササ混じり粘土を3~5cm盛り上げて上端を蒲鉾状に仕上げている。ロストル間は15cm前後の場合が多い。ただし、向かって右2条のロストルは一段低く、右から2条目と3条目の間隔が約30cmと幅広になっているので、拡張修理を行った可能性が考えられる。左から3条目のロストルの右前下方に燃焼室の奥壁がわずかに残る。

第3号瓦窯跡は有段窯で、第2号瓦窯跡から約1.7m離れている。煙出しとともに、最上部の2段の床面がわずかに残る。崖面での観察によると、煙出しは傾斜しており、奥壁付近で縦約30cm、

横約20cmの楕円形を呈し、徐々に細くなって直径10数cmになることが確認できる。

第4号瓦窯跡はロストル窯で、第3号瓦窯跡から約2.7m離れて築かれている。窯体底部の幅は内法で約2.05mを測り、高さ19cm、基底の幅約20cm、上端の幅約15cm程度のロストル5条が崖面に断面として露出している。第4号瓦窯跡から約1.9m離れて長さ約2.6mにわたって土嚢が積み上げられており、その端で崖面は野上池の堤に沿って南西方向にほぼ直角に曲がる。

3. 出土瓦について

現在のところ、府中・山内瓦窯跡出土として軒丸瓦11点、軒平瓦4点、丸瓦1点、平瓦2点が確認できる。このうち軒平瓦の1点は瓦当面を失っている。これらは全て採集品である。

(1) 軒丸瓦(第5図1～第6図7・第8図1～第9図3)⁽¹⁵⁾

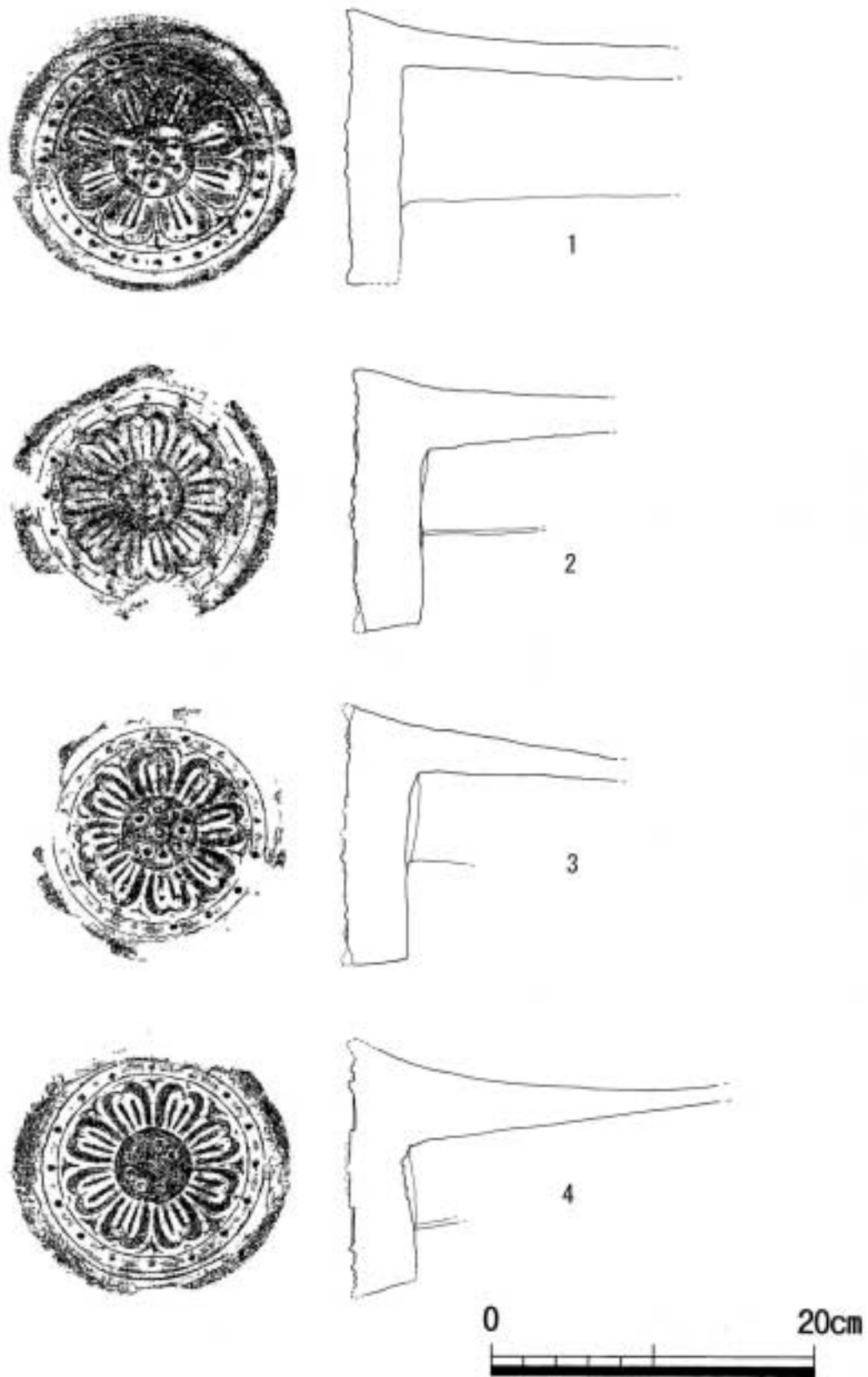
第5図1⁽¹⁶⁾は八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM03Aで、低く突出した中房に1+6個の蓮子をもち、子葉を細く、蓮弁を平板に作る。間弁は蓮弁間の先端近くから短く伸び、先端がわずかに切れ込むものがある。蓮弁・間弁の外側には円圈で挟まれた32個の珠文をもつ。丸瓦部を含めた長さは40cmで、瓦当面は直径17.2cm、厚さ約3.1cmである。

讃岐国分寺跡ではSKM03Aは均整唐草文軒平瓦SKH01Aと組み合わせと考えられている⁽¹⁷⁾。SKH01Aは八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM01とも組み合わせ、これが讃岐国分寺の再整備期における最も古い組合せであり、760年代末から770年代初期に成立したと考えられる⁽¹⁸⁾ことから、八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM03Aはこれに直続する時期に比定できる。

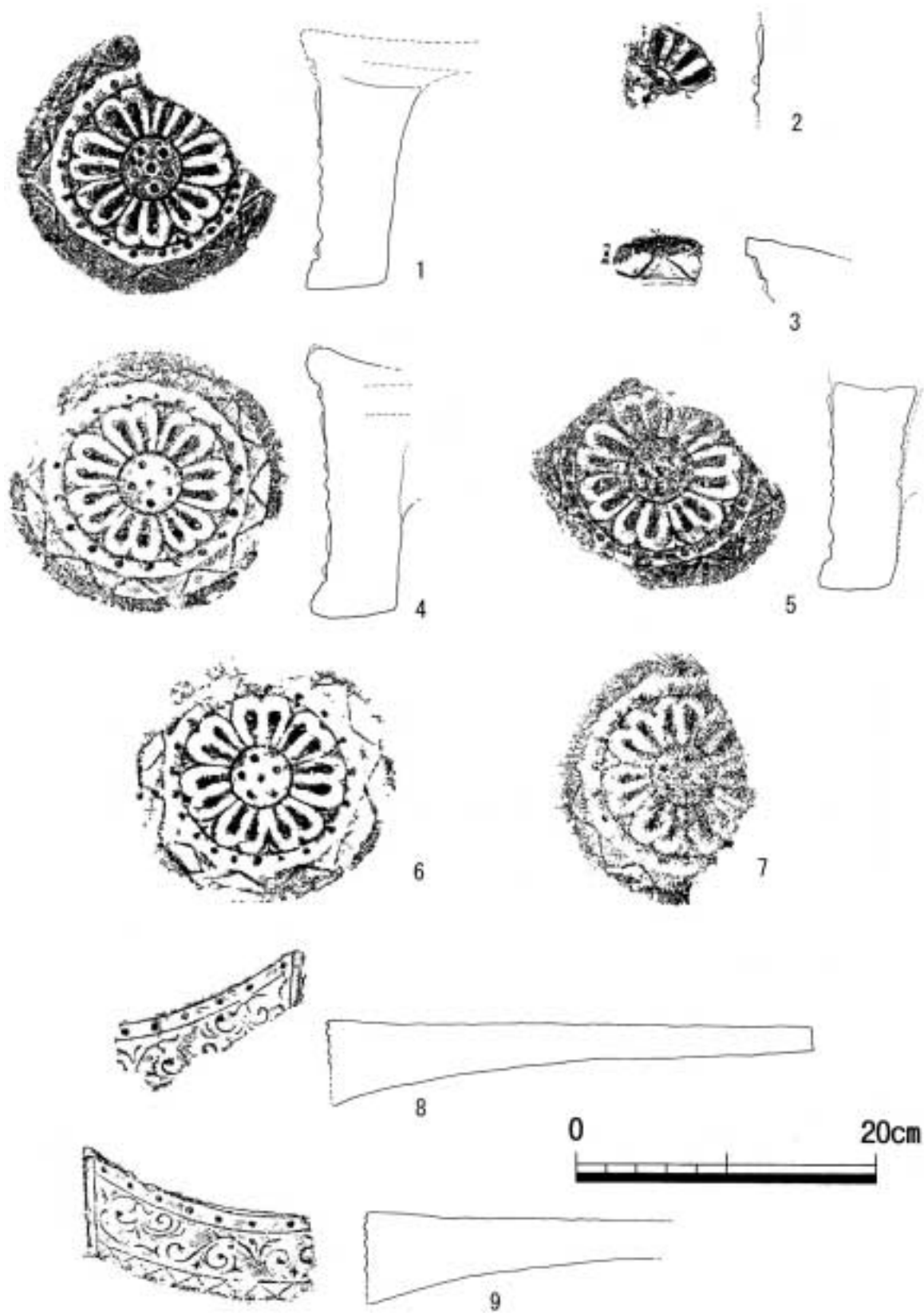
2～4は八葉複弁蓮華文軒丸瓦KB103Bで、周縁内側の傾斜面に線鋸歯文をもつKB103Aとともに、讃岐国分寺跡からは出土せず、国分尼寺専用の軒丸瓦と考えられている。低く突出した中房に1+8個の蓮子をもつ。中房や蓮弁の外周は縁取り状に盛り上がらない。子葉の外側や蓮弁間の溝が幅広となるとともに、珠文が16個に減少している。蓮弁は先端の切り込みが大きくなり、円圈との間に小さな三角形の飾りを加えている。間弁はほとんどが先端に切り込みをもつ。瓦当面の直径は16.5cm前後、厚さ約4cmである。製作は「蒲鉾状型木」による一本作りと考えられる。KB103BはSKM03Aに後続する⁽¹⁹⁾。

2は燻べ焼きされたため表面が灰黒色を呈し、軟質の焼成で、淡灰色の胎土に1～4mm大の砂粒をやや多く含む。同じく坂出市郷土資料館所蔵の均整唐草文軒平瓦SKH01C(第6図9)も燻べ焼きされており、胎土・焼成が酷似することから、両者は同時に焼成された可能性も想定される⁽²⁰⁾。

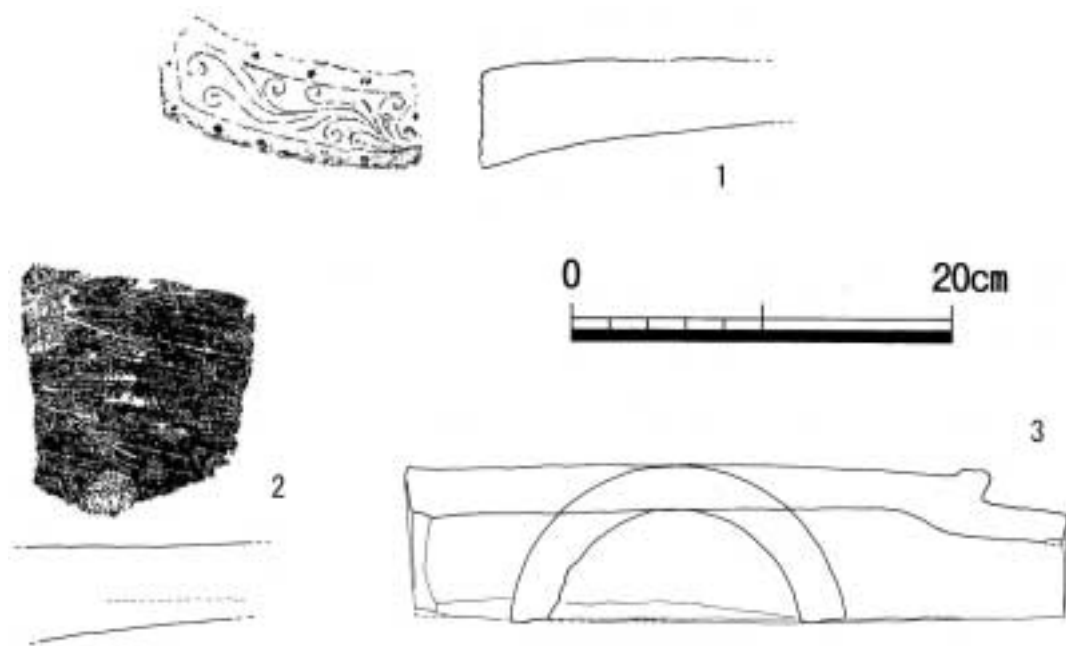
第6図1～7は七葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM07である。円圈で囲んだ中房に1+5個の蓮子をもつ。蓮弁は外縁を凸線で描き、中房近くでは隣り合う蓮弁が凸線を共有するとともに、先端部分は珠文帯内側の円圈と兼ねる。凹んだ蓮弁に盛り上がった比較的大きい2本の子葉をもつ。蓮弁先端には円圈から小さな三角形の突起を出し、蓮弁の切り込みを表現している。間弁は退化し、これも円圈から突出する小さな三角形の突起で表している。蓮弁先端と兼ねる円圈の外側に20個の珠文をめぐらせ、一段高くなって周縁内側の傾斜面がめぐり、そこに17個の粗い線鋸歯文を施す。周縁はさらに一段高くなり、明瞭な端面をもつ。讃岐国分寺跡の発掘調査では、均整唐草文軒平瓦SKH05Aと組み合わせ、10世紀中頃に比定されている⁽²¹⁾。



第5図 府中・山内瓦窯跡出土瓦 1



第6図 府中・山内瓦窯跡出土瓦2



第7図 府中・山内瓦窯跡出土瓦3

(2) 軒平瓦(第6図8～第7図2・第9図4・5)⁽²²⁾

第6図8⁽²³⁾・9は均整唐草文軒平瓦SKH01Cで、両者とも直線顎をもつ。8は全長32.3cmで、9は前述したように、八葉複弁蓮華文軒丸瓦KB103B(第5図2)と胎土・焼成が酷似する。9の凹面には布目痕を残し、瓦当側の幅約7cmは横方向のヘラケズリを施している。凸面は摩滅が著しいため明確にしがたいが、縦方向のヘラケズリを施しているようである。

SKH01Cはこの種の軒平瓦で最初に作られたSKH01Aに後続するもので⁽²⁴⁾、前述したSKH01Aの年代観から、770年代中頃から後半頃に比定できるものと考えられる。

第7図1は均整唐草文軒平瓦SKH04で、安藤文良氏が野上池の北西隅、堤の北東隅にあたる斜面に有段窖窯の上部が露出しているのを発見し、その内部から採集したものである。瓦当面の左半部を残し、界線で囲まれた内区には中心飾の下部から左に長く伸びた唐草文が展開する。

讃岐国分寺跡出土品を参考にすると、中心飾は、内部に菱形状の飾りをもつ擬宝珠状の文様を線描きし、その左右を対向する蕨手状の唐草文で囲む。左右に流れる唐草文は先端部を渦状に巻き込み、端部が若干肥厚する主葉と細く流れる支葉で構成される。上下の外区には各9個の珠文を、左右の外区には各3個の珠文をもつ。SKH04は、9世紀中頃に比定されているSKH03と比較すると、中心飾りや唐草文がより装飾的になり、後出すると考えられるので、9世紀後半頃に比定できるものと考えられる。

第7図2は瓦当部分を欠失した軒平瓦である。平瓦の下方に粘土を加えて先端部を厚く作ったことが断面から観察される。凹面は縦方向のヘラケズリ、凸面は縦方向のヘラナデで丁寧に調整している。砂粒をあまり含まない良質の粘土を用い、須恵器質の堅緻な焼成で、淡青灰色を呈する。胎土・焼成や丁寧に調整から、SKH01A又は01Cではないかと思われる。



1. KB103B (第5図2)



2. KB103B (第5図3)



3. KB103B (第5図4)



4. SKM07 (第6図1)



5. SKM07 (第6図2)



6. SKM07 (第6図3)



7. SKM07 (第6図4)

第8図 府中・山内瓦窯跡出土瓦4 (縮尺不同)



1. SKM07 (第6図5)



2. SKM07 (第6図6)



3. SKM07 (第6図7)



4. SKH01C (第6図8)



5. SKH04 (第7図1)



6. 丸瓦 (第7図3)

第9図 府中・山内瓦窯跡出土瓦5 (縮尺不同)

(3) 丸瓦(第7図3・第9図6)

完形の玉縁付丸瓦で、長さ34.9cm、幅は玉縁の付け根で15.9cm、中央部で17.5cm、先端でやや狭くなって16.7cmとなる。中央部の高さは8.3cmである。玉縁に接する筒部の外面は整わないタガ状に突出する。筒部と玉縁の上面は横方向のナデで丁寧に調整し、下面には粗い布目が残されている。筒部の先端面はヘラケズリが施されているが、玉縁の先端面は無調整である。また、筒部の一方の下端面には、分割のための切り込み痕が残されている。焼成は良好である。

(4) 平瓦

羽床氏の宅地から採集された2点の破片が鎌田共済会郷土博物館に所蔵されている。いずれも凹面に布目痕をもち、凸面には長軸に対して平行ないしは平行に近い縄叩き目をもつ。縄叩き目の上には、短軸方向に近い、斜めのナデが認められる。

以上のほか、坂出市鼓ヶ岡神社にある鼓ヶ岡文庫に、「国分寺瓦窯跡遺瓦」として八葉単弁蓮華文軒丸瓦2点(開法寺跡KH106・讃岐国分寺跡SKM09)・均整唐草文軒平瓦(讃岐国分寺跡SKH01C)各1点・丸瓦2点と、「国分寺瓦窯跡遺瓦 寄附人羽床十四吉氏」として丸瓦1点・平瓦2点が展示されている。しかし、川畑迪氏はこの軒瓦3点を開法寺跡出土としている⁽²⁵⁾。また、瓦には注記もなく、他の展示品についても出土地に疑問のあるものがみられることから、府中・山内瓦窯跡出土とする確証は得られない。

4. まとめ

府中・山内瓦窯跡から発見された瓦のうち最も古いものは770年代前半～中頃に比定できる八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM03Aであり、最も新しいものは10世紀中頃と考えられている七葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM07である。両者とも子葉間に仕切り線をもたない。子葉間に仕切り線をもたない複弁蓮華文軒丸瓦は讃岐国分寺跡・国分尼寺跡で13型式16種が確認されているが、両寺跡以外では非常に少なく、しかも散発的にしか用いられていないことから、讃岐国分寺跡を中心として用いられたことがわかる⁽²⁶⁾。このうち最も古いのは八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM01であるが、SKM03AはSKM01に文様が極めて近く、SKM01に後続すること、両者はともに均整唐草文軒平瓦SKH01Aと組み合わせと考えられていることから、府中・山内瓦窯はSKM01－SKH01Aの段階には操業を行っていた可能性が極めて高いものと思われる。

したがって、府中・山内瓦窯では、770年前後に開始されたと考えられる讃岐国分寺の再整備期から10世紀中頃まで、子葉間に仕切り線をもたない複弁蓮華文軒丸瓦をはじめとした讃岐国分寺・国分尼寺の所用瓦を焼成していたことはほぼ疑いないものと思われる。

先述したように、府中・山内瓦窯跡から出土する軒瓦はいずれも讃岐国分寺又は国分尼寺から出土している。また、現在のところ、讃岐国分寺再整備期より古い瓦は府中・山内瓦窯跡から出土しておらず、再整備にあたって最初に用いられた八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM01は讃岐国分寺跡以外では出土していない。また、SKM01と組み合わせ均整唐草文軒平瓦SKH01Aは讃岐国分寺跡・讃岐国分尼寺跡⁽²⁷⁾以外では出土していないことなどから、府中・山内瓦窯は国分寺の再整備に伴い、讃岐国衙が専用瓦屋として整備した可能性が高いものと考えられる。

また、府中・山内瓦窯が10世紀中頃まで操業していたことからすると、専用の国分寺瓦屋が比較的遅くまで機能していた例として注目される。

なお、10世紀中頃とされる七葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM07は同範瓦又は同文瓦がさぬき市長尾寺⁽²⁸⁾、高松市百相廃寺⁽²⁹⁾、高松市拝師廃寺⁽³⁰⁾から出土している。府中・山内瓦窯では、10世紀中頃においても瓦生産が盛んであった。

一方、770年代後半と考えられる均整唐草文軒平瓦SKH01Cは讃岐国分寺跡・国分尼寺跡以外での出土例がなく、前述したように、これにやや先行する八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM03Aは同範品が丸亀市宝幢寺跡⁽³¹⁾、大阪府八尾市小坂合遺跡⁽³²⁾から出土している。宝幢寺跡からは、SKM01

のもとになった八葉複弁蓮華文軒丸瓦HD102⁽³³⁾が出土し、宝幢寺の創建・維持に関わった豪族が讃岐国分寺の整備に密接に関係したことが想定されている⁽³⁴⁾。

前述したように、府中・山内瓦窯跡では10基ないし14～15基の瓦窯跡が想定されるが、これらは宅地造成と溜め池築造・改修に伴う掘削によって発見されていることから、瓦窯跡の中にはすでに消滅したものがあるかもしれない。しかし一方では、これまでに発掘調査が全く行われていないことから、発掘調査を計画的に実施すれば、さらに多くの瓦窯跡が発見されることも考えられる。府中・山内瓦窯跡では10基ないし14～15基以上の瓦窯跡の存在を想定することは十分可能であり、大規模な国分寺瓦屋であったことが予想される。

瓦窯は現状で有段窖窯とロストル窯が確認できる。第3号瓦窯跡は有段窖窯で、煙出しと最上部2段の床面をわずかに残している。これに対して、近接して残存するロストル窯の第2号瓦窯跡は燃焼室の奥壁の一部を残し、第3号瓦窯跡より残存度が高い。第3号瓦窯跡の付近では、斜面が第1号・2号瓦窯跡より約2m奥まで削られているが、第3号窯跡が窖窯であることから、長大な可能性が高いことを考えると、ロストル窯の第2号瓦窯は第3号瓦窯より斜面の奥、つまり高位に作られたものと思われる。

第2号窯を構築し、その前面付近を活用しながら操業するためには、1号窯又は3号窯の窯体下部を破壊しなければならないことから、府中・山内瓦窯跡では、有段窖窯がロストル窯に先行したことが想定できる。

ただ、有段窖窯が先行したとしても、八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM03A・均整唐草文軒平瓦SKH01Cに須恵質のものと燻べ焼されたものが存在することから、この段階には有段窖窯とロストル窯が並行して用いられた可能性が想定されている⁽³⁵⁾。SKM03A段階で府中・山内瓦窯跡においてロストル窯が用いられたとすると、香川で最も古い例となり、香川のロストル窯は讃岐国分寺の再整備に伴って畿内から導入された可能性が高いことになる。

一方、有段窖窯は藤原宮の所用瓦を焼成した三豊市宗吉瓦窯跡で用いられており、そこでの瓦窯跡の各段の角を通した傾斜角は約45°と、府中・山内瓦窯跡と同様の急傾斜の作りであり、府中・山内瓦窯の有段窖窯が宗吉瓦窯の影響を受けた可能性もあり、両者の系譜的關係が注目される。

府中・山内瓦窯跡から発見された八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM03A・KB103Bは「蒲鉾状型木」による一本作りと考えられる。同種の軒丸瓦のうち最も古い八葉複弁蓮華文軒丸瓦SKM01には瓦当と丸瓦を接合するものと、「蒲鉾状型木」による一本作りの2種があり、後者は、それ以前の香川の軒丸瓦に認められないことから、「蒲鉾状型木」による一本作りも、770年代を中心に進められたと考えられる讃岐国分寺の再整備にあたって畿内から新たに導入された技術であったと考えられる。また、軒平瓦についてみると、均整唐草文軒平瓦SKH01Aは、対葉花文をもつ東大寺式軒平瓦の中心飾をもち、ここにも畿内の影響が認められる。

しかしながら、SKM01の瓦当文様は丸亀市宝幢寺跡の八葉複弁蓮華文軒丸瓦HD102を祖型とし、讃岐国分寺跡出土の8世紀の軒丸瓦には「蒲鉾状型木」による一本作りとともに瓦当と丸瓦の接合式が併存していること、SKH01Aは当時の畿内では時代遅れとなった下外区の線鋸歯文帯をもち、SKH01B・01Cは白鳳時代以来の粘土板桶巻作りで製作される⁽³⁶⁾など、在地の技術、伝統も認められる。また、これらの瓦は畿内から新たに導入されたロストル窯とともに、旧来の有段窖窯でも焼成されたと考えられることから、讃岐国分寺再整備期における府中・山内瓦窯での瓦製作にあたって

は、新たに導入された畿内の技術と在地の伝統的技術が併存して用いられたと考えられる。これが造瓦工人の編成などの問題とどのように関わるかは今後解決すべき重要な課題である。

府中・山内瓦窯跡は国史跡に指定されて保護されているものの、これまで本格的な研究がなされなかった。このため、遺跡の規模・内容についてすら不明な部分が少なくない。今後、適切に遺跡を保護し、活用するためには、何よりもまず遺跡の内容を正確に把握することが必要であり、そのためには発掘をともなった確認調査の実施が強く望まれる。

(註)

1. 香川県史蹟名勝天然記念物調査会「国分寺及国分尼寺」『史蹟名勝天然記念物調査報告』1 香川県 1922
2. 岡田唯吉『郷土博物館第1回陳列目録』財団法人鎌田共済会 1925
3. 岡田唯吉「讃岐国分寺及全瓦窯跡」『讃岐史談』2-2 1937
4. 岡田唯吉「讃岐国分寺」『国分寺の研究』考古学研究会 1938
5. 本稿では讃岐国分寺跡出土軒瓦の型式略号は松尾忠幸ほか1996に、その他の県内寺院跡出土軒瓦は川畑聰1996に従うほか、その後に追加された型式略号は初出文献に従う。
松尾忠幸ほか『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会 1996
川畑聰『第11回特別展 讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館 1996
6. 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会 1967
7. 松本豊胤『香川県陶器古窯跡群調査報告』香川県教育委員会 1968
8. 香川県教育委員会「府中・山内瓦窯跡」『香川県の文化財』香川県文化財保護協会 1961
香川県教育委員会「府中・山内瓦窯跡」『香川県の文化財』香川県文化財保護協会 1971
安藤文良編『古瓦百選－讃岐の古瓦－』美巧社 1974
大塚勝純・黒川隆弘『讃岐国分寺の瓦と塼』牟礼印刷株式会社 1975
新編香川叢書刊行企画委員会「府中・山内瓦窯跡」『新編香川叢書 考古編』香川県教育委員会 1983
安藤文良「古瓦」『香川県史 13 資料編 考古』香川県 1987
川畑迪編『坂出市史 資料』坂出市 1988
香川県教育委員会「府中・山内瓦窯跡」『香川県の文化財』香川県教育委員会 1996
9. 松本豊胤氏は下記論文に「指定を受けているもの1基だけで、同所の羽床家の屋敷内に焚口が開口している」と記しているが、後述するように、この瓦窯跡を含め、崖面に4基の瓦窯跡の存在が確認できる。
松本豊胤「讃岐」『新修国分寺の研究』第5巻上 吉川弘文館 1987
10. 平成14年10月5日に田村久雄氏と渡部が確認した。
11. 後で紹介する均整唐草文軒平瓦SKH04(第7図1)は、昭和49年、野上池の堤の改修工事の際に安藤文良氏が池の北西隅(堤の北端東側)で有段窯を確認し、その窯体上部から採集したものである。この瓦窯跡の位置は、『史蹟名勝天然記念物調査報告1』の分布図に記載された、野上池北岸の2基の窯跡よりやや西にあたることから、野上池北岸(山内村側)の「7～8ヶ所」の瓦窯跡の一つである可能性も考えられる。
12. ただし、府中・山内瓦窯跡の地権者の一人であり、昭和2年のお生まれの羽床正男氏は、平成19年2月10日筆者に対して、幼少時に野上池の北岸の掘削面に2基の窯跡が存在していたことは記憶しているが、それ以上の窯跡の存在は記憶にないと述べており、岡田唯吉氏の記述が正しいとする確証は得られていない。

なお、羽床氏は、2基の窯跡は断面の上部が円弧状であったとしていることから、これらは有段窖窯であったと考えられる。

13. 註7に同じ。
14. 白川雄一氏によれば、現状の瓦窯跡が極めて短いことなどから、窯体の下部は宅地造成に伴う盛り土中に埋もれている可能性が強いのではないかとしている。確かに、現状では燃焼部の段が異常に低く、宅地造成後に残存する現状で遺構の全てを判断するのは危険であり、発掘調査によって本来の瓦窯跡の規模・構造を明らかにする必要がある。
15. これらの軒丸瓦は以下の文献で紹介されている。
 - 第5図1：安藤文良編『古瓦百選－讃岐の古瓦－』 美巧社 1974
安藤文良「古瓦」『香川県史 13 資料編 考古』香川県 1987
 - 第5図3：大塚勝純・黒川隆弘『讃岐国分寺の瓦と埴』牟礼印刷株式会社 1975
 - 第5図4：安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会 1967
新編香川叢書刊行企画委員会「府中・山内瓦窯跡」『新編香川叢書 考古編』香川県教育委員会 1983
安藤文良「古瓦」『香川県史 13 資料編 考古』香川県 1987
川畑迪編『坂出市史 資料』坂出市 1988
 - 第6図1：新編香川叢書刊行企画委員会「府中・山内瓦窯跡」『新編香川叢書 考古編』香川県教育委員会 1983
川畑迪編『坂出市史 資料』坂出市 1988
 - 第6図4：安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会 1967
安藤文良「古瓦」『香川県史 13 資料編 考古』香川県 1987
 - 第6図6：岡田唯吉「讃岐国分寺」『国分寺の研究』考古学研究会 1938
 - 第6図7：岡田唯吉「讃岐国分寺」『国分寺の研究』考古学研究会 1938
16. この瓦は実見できなかったので、主に安藤文良氏の実測図・拓本を参照させていただいた。
17. 松尾忠幸ほか『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和60年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会 1986
渡部明夫「讃岐国分寺跡出土軒丸瓦の編年～子葉間に仕切り線をもたない複弁蓮華文軒丸瓦の編年について～」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅱ 香川県埋蔵文化財センター 2006
18. 渡部明夫「軒平瓦SKH01の瓦当文様からみた讃岐国分寺の造営年代」『香川史学』31 香川歴史学会 2004
19. 渡部明夫「讃岐国分寺跡出土軒丸瓦の編年～子葉間に仕切り線をもたない複弁蓮華文軒丸瓦の編年について～」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅱ 香川県埋蔵文化財センター 2006
20. 註19に同じ。
21. 松尾忠幸ほか『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和60年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会 1986
松尾忠幸ほか『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会 1996
22. これらの軒平瓦のうち、第6図8は以下の文献で紹介されている。
 - 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会 1967
 - 川畑迪編『坂出市史 資料』坂出市 1988
23. この瓦も実見できなかったので、安藤文良氏の実測図・拓本を参照させていただいた。
24. 渡部明夫「讃岐国分寺創建軒平瓦の型式学的再検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』XI 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2004
25. 川畑迪編『坂出市史 資料』坂出市 1988

26. 註19に同じ。
27. 米崎旭氏の採集資料に1点認められる。渡部明夫「瓦からみた讃岐国分寺の造営時期について」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅲ 香川県埋蔵文化財センター 2007
28. 松尾忠幸ほか『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会 1996
安藤文良編『古瓦百選－讃岐の古瓦－』美巧社 1974
29. 安藤文良編『古瓦百選－讃岐の古瓦－』美巧社 1974
30. 川畑聰『第11回特別展 讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館 1996
31. 註28及び藤井直正「讃岐国古代寺院跡の研究」『藤沢一夫先生古稀記念 古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念論集刊行会 1983
稲垣晋也「南海道古瓦の系譜」『新修国分寺の研究』第5巻上 吉川弘文館 1987
松尾忠幸『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会 1987
32. 駒井正明ほか『小坂谷遺跡－都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書－』財団法人大阪府文化財調査研究センター 2000
33. 稲垣晋也「南海道古瓦の系譜」『新修国分寺の研究』第5巻上 吉川弘文館 1987
松尾忠幸ほか『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会 1996
34. 松尾忠幸ほか『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会 1996
35. 註32に同じ。
36. 松尾忠幸『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会 1987
松尾忠幸ほか『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会 1996

本稿で使用した資料は、以下のとおりである。

第5図1・第6図8	：	田中一治氏資料
第5図2・第6図9	：	坂出市郷土資料館資料
第5図3・第6図5・第7図3	：	羽床正男氏資料
第5図4・第6図1～3・第7図2	：	川畑 迪氏資料
第6図4・第7図1	：	安藤文良氏資料
第6図6・7	：	鎌田共済会郷土博物館資料

本稿をまとめるにあたって、安藤文良氏、川畑迪氏、田村久雄氏、羽床正男氏、白川雄一氏、岡山理科大学亀田修一氏に多くのご指導・ご教示・ご協力をいただくとともに、安藤文良氏、川畑迪氏、羽床正男氏にはご所蔵資料の実測・拓本や、その使用について多くの便宜をいただいた。また、府中・山内瓦窯跡の現況図作成と瓦断面図のトレースには高松市教育委員会渡邊誠氏の、瓦の採拓には香川県埋蔵文化財調査センター(現まんのう町教育委員会)加納裕之氏・(現熊本市教育委員会)中里伸明氏、香川県教育委員会信里芳紀氏の協力をいただいたほか、鎌田共済会郷土博物館森山修司氏・西川桂子氏、坂出市教育委員会今井和彦氏をはじめ多くの方々にご教示、ご協力をいただいた。末筆ながら厚くお礼を申し上げたい。

本論において、第1号瓦窯跡(有段窑窯)の焚き口・燃烧室・焼成室の下部が造成地の下に埋まっているのではないかとする白川雄一君の見解を紹介させていただいた。この見解は、平成17年の秋、彼と府中・山内瓦窯跡を訪れた時に聞いたものである。

白川君は、当時彼が調査・整備を担当していた三豊郡三野町宗吉瓦窯跡との関係で、府中・山内瓦窯跡にも強い興味をもっていた。そこで、府中・山内瓦窯跡の見直しを進めていた僕と遺跡を訪ねたのだった。

僕は白川君に、残存する4基の瓦窯跡や出土瓦、瓦窯跡全体の見直しなどを説明したが、説明が終わると、彼は第1号瓦窯跡は短すぎるので、窯体の下部は下に埋まっているのだろうと感想を述べた。

いわれてみれば、第1号瓦窯跡はあまりにも短すぎ、最下段は一般的な燃烧室の構造と大きく異なるので、自分の迂闊さに呆れるとともに、宗吉瓦窯跡の瓦窯の構造からみた第1号瓦窯跡の問題点を説明する彼の説得力のある見解を拝聴した。

白川君は、学生時代には旧石器が専門であった。しかし、三野町教育委員会・三豊市教育委員会では宗吉瓦窯跡の指定・調査・研究・整備に邁進され、発掘調査報告書『宗吉瓦窯跡』で瓦窯と出土瓦を詳細に検討するとともに、整備事業にも意欲的に取り組まれた。宗吉瓦窯跡の整備事業が完成に向かおうとする中、彼がいないのは残念でならない。

志半ばで、若くして逝った白川君の見解をここに紹介するとともに、本論を白川君に捧げたい。

第1表 図版・写真の引用文献等一覧

図版番号	図番号	引用文献
1		香川県史蹟名勝天然記念物調査会「国分寺及国分尼寺」『史蹟名勝天然記念物調査報告』1 香川県 1922
2		松本豊胤『香川県陶邑古窯跡群調査報告』香川県教育委員会 1968
5	1	安藤文良氏拓本資料
6	6・7	鎌田共済会郷土博物館資料
	8	安藤文良氏拓本資料